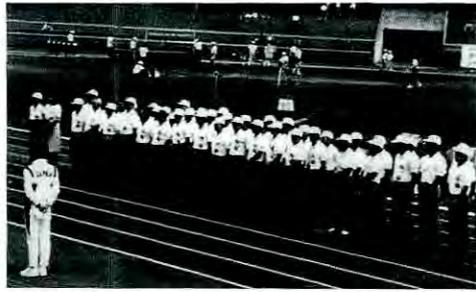


思い出の写真シリーズ 第12回

白田 昭次

昭和38年4月1日より長野市に於いて私学校にまいりました。本当に長野は良い所です。私の担当するのは、陸上、バレーの2件です。特に陸上をやっている生徒達が退部して行き、春の市内高校の大会に2、3年組が退部をし、大会にどのような事でやればと思い、新入生のみでの大会ではと考えていると、バレーの生徒達が、「先生、私達をつかって下さい」と、特に2年生の体格の良い生徒がよってきたので、投てきをそれを円盤を使用させ、常に走る事を指導しました。



1年生2名、2年生1名、3年生1名のリレーをつくり始めてのメンバーです。終わってみて、ゴールしたときは2位でした。2年生の生徒は円盤で懸命にやり、あと1cmあればインターハイとなりました。1年生もそれが3年になり、大分県にインターハイに行き、頑張りましたが、(5種競技)残念でした。生徒達に常に勉強を常に走りましようと言いつつ、冬は走りソフトボールをしていました。7年間勤めました。学校の狭いグラウンド(150M)に市内高校より強い連中が練習にきていました。ハードルと投てきをやっていました。生徒達が特にハード

ルが1、2位が他校に負けてると言っていました。(他校よりは学校の許可をもらってきていました。)

先輩、先生方にはいろいろと指導をいただきましてありがとうございました。計時審判員、決勝審判員のみなさん、あの頃は本当にありがとうございました。

- 昭和51年8月1~5日 全国高等学校陸上競技対校選手権会(長野市)
- 昭和53年10月16~20日 国民体育大会秋季大会(松本市)
- 昭和53年10月28~29日 全国身体障害者スポーツ大会(松本市)
- 昭和56年8月22~23日 日本、中国、カナダ対抗ジュニア陸上競技大会(長野市)
- 昭和60年9月8日 国際陸上競技長野市大会
- 昭和63年9月15日 オランダ・中国・日本 ソウルオリンピック陸上競技タイムトライアル長野大会
- 平成2年9月9日 日本学生陸上競技選手権大会(長野市)
- 平成17年8月27日 東海選手権大会(松本市)
- 平成18年4月16日 第8回長野マラソン・第2回車いすマラソン

県縦断駅伝ご支援ご協力のお礼

長野市陸上競技協会 会長 伊藤利博

今年も長野県縦断駅伝競走大会、長野市チームの為に、ご協力を頂いた各企業の方々、会員の皆様方、誠に有難うございました。心より感謝申し上げます。皆様方からご支援、ご協力を頂いたお陰で、2年振り9回目の優勝を果たす事ができました。この優勝におごらず、又来年に向かかって選手達と共に、努力していくつもりでありますので、これからもご支援、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。ご協力頂いた企業

名、会員名を掲載させていただきます。(順不同)

- 佛奥アンツーカー 佛車屋日詰 中央館清水屋旅館 御宿記念館 佛長野スター商会 佛アイフ徽章
- ホテル信濃路 ホテル犀北館 佛JTB中部 長野赤十字病院 佛芝上建設 佛長谷川体育
- 轟 正満 飯島道信 夏目 敏 古澤久二郎 山本晴雄 寺島大士 古田新造 浦野義忠 伊藤利博

会報14号(11月8日)付けの訂正

内山先生博士号の記事で、名前了治⇒了治。『陸上競技場サーフェンス』⇒サーフェス
競技場の使用延長の会長の記事で、白紙にペンうんぬんの件については、陸上関係者が、許可を得て記入した事が判明しました。

編集後記

第55回記念 長野県縦断駅伝競走 2006.11.18-19 開催され、長野市が見事2年ぶり通算9回目の優勝。おまけに、なんて言う失礼になるが、大会最優秀選手に女子18区で区間新を出した小田切亜希さんに決定。誠に嬉しい限りであります。11月20日の信毎記事は最高。選手ではないのに竹内万祐先生まで選手より大きい顔で写ってありました。11月19日飯田合同庁舎の閉会式。多くの競技役員の皆様共々、長野市チームの選手

に金メダルを首にかけてあげられたことに喜びを感じました。また、昨年はゴール地点で上伊那の胸上げを指をくわえて見ていましたが、今回は良く頑張ってくれて、長野市チームの胸上げを笑顔で見ることができました。11月30日(木) ホテル信濃路で優勝祝賀会兼忘年会。この上ない勝利の美酒に酔いしれました。

また、心を引き締めて来年も勝ちに行くことを願っております。平成18年12月 広報部長 若松軍蔵

SHINANO MATE
ATHLETIC UNIFORM
株式会社 しなのメイト
〒389-0006 埴科郡埴科町大字上五明992-2
PHONE (0268) 91-1356
FAX (0268) 91-1337



題字の“動き”は長野市陸協三代目会長 山浦保氏の書で、山浦会長の頃、市陸協会報紙として何号か発行されていました。

発行所 長野市陸上競技協会
発行人 浦野義忠
編集人 若松軍蔵

長野市チームにメンバー入りして

徳武源介

11月18、19日に、第55回長野県縦断駅伝が開催されました。私は、昨年まで上水内のメンバーとして、県縦に7回出場させて頂き、上水内が21年ぶりの復活を果たし、49回大会で復活後最高の8位入賞を果たしました。

小さな頃から、上水内のユニホームを着て走る父を見て「いつか自分も上水内のユニホームを着て走りたい」という気持ちが強くありました。そして、社会人1年目、念願の上水内メンバーとして県縦を走り、数年後には自分がチームを引っ張っていかねばならない1人になっていました。そんな中、戸隠村が長野市への合併の話が持ち上がりました。私の心の中で、「自分を育ててくれた上水内を離れたくない」「何とか上水内で走りたい」そんな気持ちが強くありました。しかし、2005年1月に正式に合併。そして、県縦は今年の大会より、合併後の枠組によるチーム編成となりました。決まった時は正直言いますと、複雑な気持ちもありました。しかし、田中監督に熱心に誘って頂き、また仕事柄なかなか合同練習など参加できないのにも関わらず、前島キャプテンはじめメンバーの皆様が温かく迎えて頂き、本当に感動しました。この場

をお借りし感謝申し上げます。そして私は自分が必要とされる以上、長野市のメンバーとして駅伝を走ろうと気持ちを切り替えました。

大会3週間前、私は12区を走ることが決まりました。アンカーはプレッシャーもあり、今年は故障も続き、本格的に練習ができたのも9月からとあって、不安もありました。

大会当日、今までにないプレッシャーを味わいました。全佐久が大きくリードしていましたが、プレッシャーの中、私は全員を信じ、必ずトップで来ると信じていました。信じていた事は現実になり、熊田君はトップでタスキをつないでくれました。私は負ったせいか、自分の走りができないままでしたが、トップでゴールテープを切ることができました。2日目も勝ち、この喜びを忘れず、トップを走り続けていきます。今後チームの一員として貢献します。



長野県縦断駅伝

2年振り

9回目の優勝

3年ぶりにチームに復帰して

大久保貴志

今回優勝することができたのは、応援していただきました皆様のおかげだと感謝しております。

今年1年間、田中監督や前島キャプテンの指導のもと練習に励んでまいりました。選手1人1人、様々なおもいで今回の長野県縦断駅伝に望んだと思います。昨年、3位という悔しい思いをした選手、合併で新しく入ってきた選手、大学から地元に戻ってきた選手。私も実業団から地元に戻ってきた1人です。このような色々な選手が一丸となれたからこそ優勝を勝ちとれたと思います。

私は、3年ぶりにチームに復帰しました。今年に入り、東京・琵琶湖・長野と3ヶ月間に3本のマラソンに出場しました。その疲れが取れず、今期あまり良い成績を残すことができませんでしたが、田中監督は4区16.4Kを他の選手に替えることなく



私を使ってくださいました。私は、その思いを無駄にしたいくない一心で、体調を戻す練習やマッサージ、針治療などをおこない上げてきました。その結果、3位で襷をもらい2位へと順位を上げ、チームに流れを作ることができました。

この長野県縦断駅伝がなければ、私はここまで成長できなかったと思います。私はこの駅伝から多くのことを学び、青東駅伝・国体など県代表として走ることができました。そして中山監督が指導している愛知製鋼陸上部にも入ることができました。愛知製鋼では、レベルの高い練習ができ、ハーフマラソン・マラソンなどで自己ベストを更新。また、ニューイヤーの予選会、中部地区大会では2年間選手として走ることができました。私が愛知製鋼陸上部に所属していたのは2年間ですが、とても充実した2年間でした。

これからの私は、今までの経験をどれだけ伝えられるかわかりませんが、若い選手の育成に務めていきたいと考えています。

優勝を支える社会人選手

—第55回長野県縦断駅伝より—

中村好成

今年の県縦断駅伝で、私は20人の選手がつないでくれたタスキをゴールまで届ける役割を任せられました。不安や緊張はありましたが、初日に大きなアドバンテージを得ていたことで、心のゆとりを持つことができ、大声援を送る仲間が待つゴールをトップで駆け抜けることが叶いました。サポートして頂いた関係者の方々に対して、この紙面をお借りして、まずは一言述べさせて下さい。「本当にありがとうございました！」と。

今大会では、新たに「ふるさと選手」制度が導入されましたが、終わってみれば、我々だけでなく準優勝の上伊那もふるさと選手を起用することなく、各地域で地道に練習を重ねているチームが上位に並びました。

一方で、有力選手を実業団からレンタルし、長距離区間で貯金を作り出そうとしたチームの成績はふるわなかったようですが、地域の合同練習を重視せず、選手間の仲間意識も薄かったという話も耳にします。もしそのようなチームがあるとするれば、駅伝の本質を見誤っていると思えず、残念でなりません。



2年ぶり9回目の縦断のゴールテープを切る中村好成選手(信濃毎日新聞社提供)

長野市チームの土台は、前任の丸田監督や高野主将からも受け継がれている「和」に支えられています。活気あふれる練習会の雰囲気や、メンバーの温かい人情に魅力を感じ、市外の会社に勤務しながらも、長野市から出場することを選択した選手も少なくありません。時間的・金銭的に恵まれた実業団選手に対し、我々が日常勤務の傍らで、限られた時間をやりくりしながらも練習を続けることができる理由は、そこにあると思います。当座の成績のためにレンタル選手でタイムを稼ぐのではなく、時には時間をかけてでも、後進を育成するために、地域の練習によって地道に総合力をつけていくことこそ、55年もの長きに渡って続く本大会の目指すべき方向であってほしいですし、今後も長野市を本当に強いチームにするために、力を合わせていきたいと思えます。

ジュニア選手権大会に入賞して

桜ヶ岡中学校 3年 中田優菜

ジュニアオリンピックは、ハードルに出会った私が、1年生で最初に経験した全国大会です。それから今までにも、いくつかの全国大会に出場させていただきましたが、少しづつ記録はのびてきているものの、1度も決勝まで進む事はできませんでした。なので、私にとって中学校生活でハードルを跳ぶ最後となるこの大会には、特別な思いがありました。



前日練習は、思い通りの走りができず、不安のままJ0当日を迎えました。予選は、15秒48とやはり最悪な結果が出てしまいました。なので、気持ちを切

り替え、自分が楽しめる走りをしよう、と決めて、準決勝に臨みました。それにより、イメージ通りの走りができ、準決勝は14秒台が出て、8位同着でしたが、9人で決勝に進むことができました。

決勝が始まる頃は、外が暗くなり、競技場がライトアップされ、また違う緊張感につつまれていました。私にとっては中学最後のレースです。リラックスして最高の走りをしよう、ただそれだけを考えていました。走り終わり、8位入賞で、ベストの14秒82が出たと分かった時は、本当に嬉しかったです。あの雰囲気は、一生忘れられません。この結果が出せたのも、指導して下さいましたコー子の先生、応援して下さいました方々がいたからです。本当にありがとうございました。高校へ行っても、常に最高の走りができるよう、頑張っていきたいです。

第11回 ホープさん

「夢に向かって一歩前進！」

長野東高校1年 小田切亜希



私は今年の4月、陸上をやるために、長野東高校に入学しました。玉城良二先生にご指導をいただけること、新しい仲間とチームを作っていくこと、全てが楽しみでとてもワクワクしていました。

始めは、中学の時と全く違う練習環境に慣れるのが大変でした。春季大会、北信大会、県大会となかなか記録が伸びなかった私を変えたのは、北信越大会でした。高校に入ってからの目標の1つに、私はインターハイをおいていました。全国大会に出るには、北信越で6位入賞をしなければなりません。その時の私は、不安や緊張などに押し潰されそうでしたが、心の隅では、「自分の力はどこまで通用するんだろう」という楽しみな気持ちもありました。

レースは前半から積極的に出て、後半も強い気持ちを持って粘り、結果は自己ベストで4位入賞を果たしました。全国の舞台で、全国の強豪と戦えることが本当に嬉しかったです。そして、自分

が1歩前に踏み出せたような気がして、とても自信になりました。インターハイでは、全国の舞台を前にして自分の弱さが出てしまい、ベスト更新もできずに終わりました。でも、この経験がまたバネになり、力になり、10月の国体ではベストを大幅に更新し、また私に自信をつけてくれました。

私が、こうして大きな舞台に立たせていただいたり、頑張ることができるのは、熱心に指導して下さいました先生方、一緒に練習している仲間、いつも応援してくれる方々、全ての人の支えがあるからです。この感謝の気持ちを、走りでも表していきたいと思います。大きな夢に向かって、全力疾走していきます！！

山本晴美選手17年間の選手生活閉じる

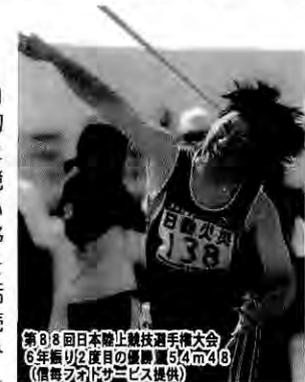
山本晴美

あつという間の17年間でした。私は小学生の頃にソフトボールをしていましたが、中学ではソフト部がない為にバレーボール部に入部しようとしていた私が、陸上競技に足を踏み入れたのは、山田良徳先生の勧誘でした。3回ほど断ったのは記憶にありますが、短距離選手として入部しました。入部した私を容赦なく鍛えていただいていた(笑)毎日家に帰るのがやっとという感じてました。ソフトボールをしていたせいもあり、3年生の時ジュニアオリンピック大会のボール投げ競技で3位になったのがきっかけで、高校でやり投げをはじめました。

高校でも容赦なく伊藤利博先生は、毎日朝・夕の部活動に顔を出し、基礎トレーニングをみっちりしつくりくやりました。みるみる体力も食欲?も増しやり投げの練習も1投1投大事にしっかりと投げ意識を持ちながら、インターハイ出場を目標に日々歯を食いしばって頑張りました。夢のインターハイに出場が決まった時は、優勝候補の一員に名前を挙げていただく位になり、それによって入賞ではなく優勝目指して気持ちを高めていったのを良く覚えています。

インターハイ・国体共に4位という、自分にとっては残念な結果になりました。優勝したのは、今の日本記録を持つ三宅貴子でした。彼女と同じ大学に通うことになり、日々常に彼女と競争でした。ジャンプにしてもダッシュにしても彼女は絶対に私には負けない! と言ってはどちらかが『参りました』と言うまでは本数がどんどん増えていきました。16時からの練習で終わるのが20時から21時。寮のご飯はいつも冷めた物を食べていました。当時の中京大学のやり投げ選手層が厚く、校内選考が全国大会をしている状態でした。1年次にインカレに出場し3位になりましたが、2、3年と出場できず、4年生の時に何とか出場権を得て、4年間インカレ経験のある三宅を抑えて優勝することが出来ました。これは、やり投げ競技17年間の中で一番興奮した大会でした。

やり投げするのは、もう大学生までだと思っていま



第88回日本陸上競技選手権大会 6年振り2度目の優勝(54m48) (信濃毎日新聞社提供)

した。長野に帰ってもコーチはいないし、思い切りやり投げれる環境がないし、誰も社会人で競技している選手がいないと思っていたから。長野市役所で大変がままを聞いていただいてお世話になり、何とか競技を続けることを決めて、休みや遅番の午前中を利用して練習をしましたが、大学生の時よりかなり練習量が減り、思い切りウエイトトレーニングできる場所もなくて、思い切りウエイトトレーニングでできる場所もなくて、使える時間でどう練習していくのかすごく考えていきました。その考えた練習方法がうまくいき、社会人2年目にバンコクで行われたアジア大会に日本代表で出場することが出来ました。結果は5位でしたが、すごく手ごたえがあり、優勝は出来なくても3位になれる自信がありました。逆の空回りしてしまいました。それからオリンピック出場を目指しましたが、結局アジア大会が一番大きな大会となってしまいました。

本当にたくさんの方々に応援され、支えられ17年間競技をしてこれました。もちろん家族、職場の理解がなければこんなに長い間やってこれなかったのも感謝しています。これからは、今まで痛めつけた体をケアしながら、私の経験してきたことを伝えていけたらと思っています。

最後に、私の為に一緒に泣いたり笑ったりしてくれた家族や友達、やり投げの練習を円滑に出来るような施設を投げれる環境にさせていただき、大会や遠征の補助をしていただいた長野市陸協の方々へ深く感謝いたします。本当に長い間お世話になりました。ありがとうございました。

陸上クラブ紹介

No.12

文大長野高校

文大陸上競技部は、現在マネージャーを合わせて11人で活動しています。

今年の成績は北信新人総合3位、県新人総合3位、北信越新人では個人4名、400mR、1600mRに出させて頂きました。その中でマイルリレーと、個人3名が入賞という好成績を挙げる事が出来ました。

今、私たちは来年に向けて冬季練習に励んでいます。主に体力づくりで、メディシンボールやパーベルを使ったり、ダッシュ、JOG等を行なっています。来年結果を出すためには、この冬が一番大切なので、部一丸となって練習に取り組んでいます。どんな練習でも明るいチームのムードメーカーがいるおかげで、いつも明るく元気で楽しい毎日を送っている陸上競技部です。

来年のチーム文大の最大の目標は、1人1人『全国大会』に出場することです。今まで夢だと思っていた全国大会。今はそうではありません。限界は自分で作るもの。諦めないで前に進めば必ず結果がつ



いてくる。自分を信じ、仲間を信じ、これからまた更に大きく成長し、チームが一致団結して、必ず夢をつかみとってみせます。

強い精神力を養うと共に、競技者としてすばらしいアスリートを目指して頑張ります。

これからも文大へのご指導、ご支援を宜しくお願い致します。 文大長野高校 部長 尾身 綾